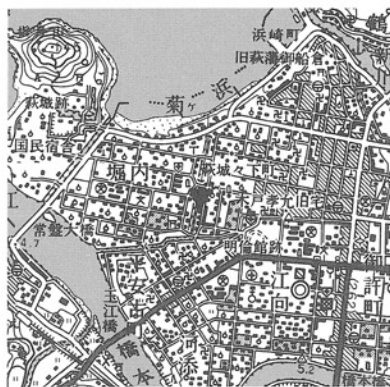


山口・萩城跡（外堀地区） はぎじょう

- 1 所在地 山口県萩市南片河町
- 2 調査期間 二〇〇一年度調査 二〇〇一年（平13）四月～

二月

- 3 発掘機関 (財)山口県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 内山雅司・堀田浩一・藤井英治・小林善也
- 5 遺跡の種類 城下町跡（町屋）
- 6 遺跡の年代 近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（萩）

調査地は、毛利氏の居城である萩城の三の丸と城下を分ける外堀の東岸に位置する。今回の発掘調査は道路整備事業に伴うもので、南北約七〇〇m東西約二四mを一九九七年から順次調査している。外堀は当初幅二〇間（約四〇m）あったとされるが、一八世紀の中頃には八間（約一六m）に狭められ、

その一二間（約二四m）分に「北片河町」「南片河町」と呼ばれる町屋が形成された。軍事上大切な堀側に町屋が進出する希有な例といえる。砂堆を掘り込んだ堀に進出した町屋の遺跡であるため、下層面は水分を多く含み、木製品や骨角製品などが良好な状態で出土する。それらの中に、墨書された木製品が含まれていることが多い。

二〇〇一年度調査区は、南北に延びる外堀のほぼ中間に位置し、城内へ通じる「中の惣門」に続く「御成道」の南側、東西約二〇m南北約三〇m、面積約六〇〇㎡の区画である。「南片河町」の中心部分と思われ、遺跡を特徴づけるような遺構・遺物の検出が期待された。検出した遺構は、建物（石列や礎石）とそれに付随する生活遺構（井戸、埋甕、厩、竈、ゴミ穴、胞衣埋納遺構）、町屋を区画する石列や堀の傾斜面を嵩上げる石垣遺構である。外堀が構築されて幕末に至るまでに大きく五つの生活面があることがわかった。

木製品溜まり二八五は、調査区南半堀側に広がる黒灰色粘質土の堆積層である。南北方向に構築された石垣二五五の基底部から南北一三m東西六・四m厚さ最大七五cmを測る。四面から五面にかけての遺構と思われる、この堆積土からは一七世紀中頃の肥前陶磁器や萩焼などの在地陶器を中心に、下駄・漆器碗・櫛・柄杓・曲物などの木製品などが多量に出土した。埋土の堆積状況や遺物の出土状況からみて、一七世紀中頃までは堀の中、もしくは堀端の淀みのような場所であった可能性が高く、そこに生活廃材が廃棄されていたもの

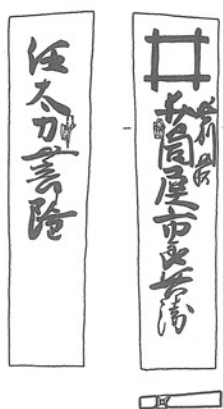
と考えられる。墨書のある木製品は二八点で、すべて木製品溜まり二八五からの出土である。そのうち木札状のものは一四点で、他に曲物の底や桶の底、棒状の木製品などがある。ここでは報告書に掲載できた木札状の木簡一三点と棒状のもの一点について紹介する。

8 木簡の釈文・内容

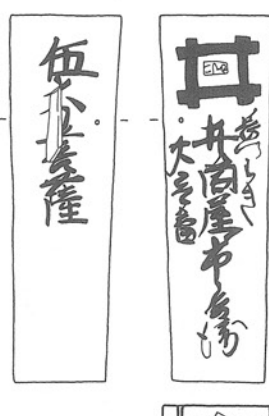
- (1) 長門はき
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
〔目印ノ中ニ黒印「いつゝや」(横向き)アリ〕
228×66×9 011
- (2) 長州萩
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
〔太カ〕伍太力菩薩
222×53×10 011
- (3) 長州萩
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
子ノ九月□□三十六
235×66×11 011
- (4) 〔筒屋カ〕井□□
〔焼印〕井
長州萩
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
211×57×10 011
- (5) 長州萩
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
218×57×9 011
- (6) 〔目印〕
伍太力〔菩カ〕
221×55×10 011
- (7) 〔目印〕
207×41×8 011
- (8) 長州萩 井筒屋市郎兵衛〔衛カ〕
〔目印〕
216×51×9 019
- (9) 長州萩
〔目印〕井筒屋市郎兵衛
子ノ九月□□三十六
211×57×10 011



(3)



(2)



(1)



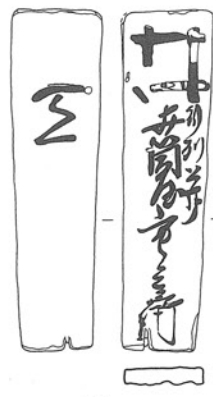
(8)



(7)



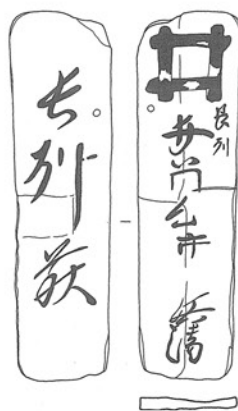
(6)



(5)



(11)

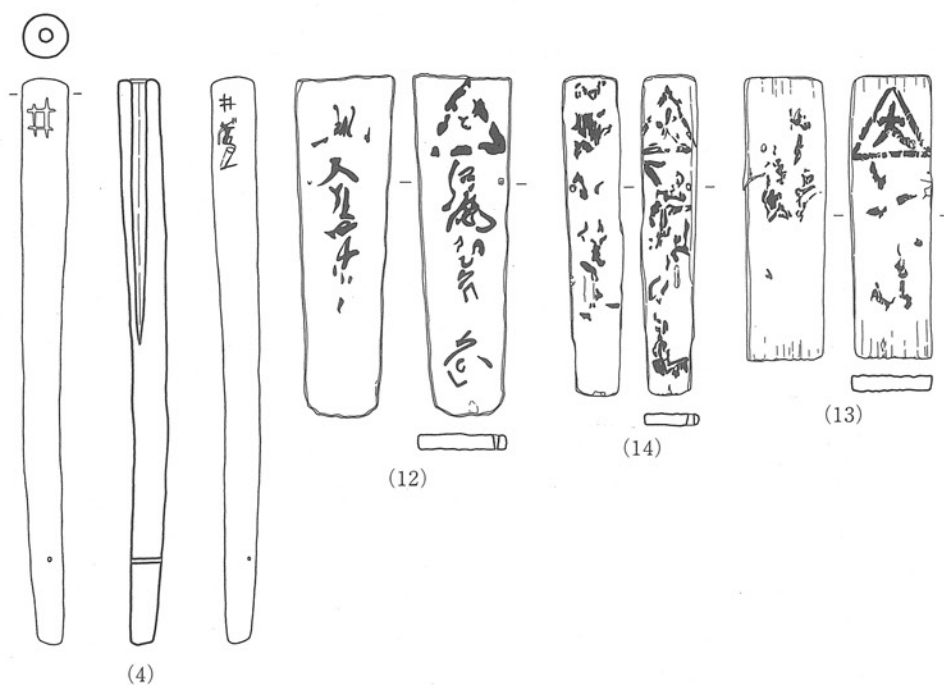


(10)



(9)

- (1) (11)に見える井筒屋は屋号と考えられる。墨書または焼印で井
- (14) 長州
〔目印〕 井 市 兵衛
〔筒屋カ〕
- 231×62×7 011
- (11) 長州萩
〔四〕〔目印〕 井筒 〔屋市郎兵衛カ〕
- 243×62×8 011
- (12) 〔目印〕 〔伍太力 菩カ〕
- 212×62×10 011
- (13) 〔目印〕
- 176×51×9 011
- 200×34×7 011



桁状の目印が入る点でも共通する。このうち(4)を除く一〇点はいずれも柃目の板材を短冊型に切断加工した木簡で、上部の左右どちらか一方所に釘目孔とみられる穿孔が認められる。(9)は下部が腐蝕欠損しているが、残存部からみて同じ形式のものと思われる。(3)の「子ノ九月」は、共存する陶磁器類の中心年代が一七世紀中葉であることから、戊子の慶安元年(一六四八)、庚子の万治三年(一六六〇)、壬子の寛文二年(一六七二)が候補となるが、(9)の墨書からみて寛文一二年の可能性が最も高いと思われる。「井筒屋市郎兵衛」という商人については他に関連史料がなく、今回の木簡で初出とみられ、詳細は不明である。

(1)(2)(6)(11)(12)の裏面に見える「伍太力菩薩」は、密教系の五人衆からなる忿怒仏のことで、三宝と国土を守護する国家守護の菩薩とされる。しかし、近世においては、特に密教系の忿怒仏の変容が激しく、その多くが庶民化により福神化し、五大力菩薩もまた本来の教理とずれながら世俗的な仏として信仰されていたようである。例えば、手紙を出すときに相手に間違いなく届くようにとの願いを込めて紙の封じ目に「五大力」と書く行為が主に女性の間で広く行なわれており、井原西鶴の『日本永代蔵』にも手紙の封じ目に「五大力菩薩」と書く一節が描かれている。この木簡に墨書された「伍太力菩薩」も、おそらく何らかの祈願を込めたものと考えられる。

(12)・(14)の三点の木簡は、前述の一〇点の木簡と類似する。墨書の

残存が悪く判読が困難であるが、いずれも「△」に「大」の目印が入る。「井筒屋市郎兵衛」とは別の商人の屋号を示すものである。このような内容の木簡の出土例は他地区にはなく、また類例も乏しいためその性格については判然としない。近世遺跡で出土する木簡で一般的なものとして荷札木簡があるが、記載内容に内容物、数量、送り主、送り先がなくては用をなさない。この点で今回出土した木簡について安易に荷札とすることは躊躇され、その性格の究明は今後の課題である。

なお、木簡の釈読にあたっては、萩博物館の樋口尚樹氏、山口県文書館の山田稔氏のご教示を得た。

9 関係文献

(財)山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター『萩城跡(外堀地区)Ⅱ』(山口県埋蔵文化財センター調査報告四六、二〇〇四年)

(井川隆司)